

平成21年5月27日現在

研究種目:基盤研究(B)

研究期間:2006~2008

課題番号:18320122

研究課題名(和文) 英雄の条件——近現代ヨーロッパにおける軍事英雄観の展開

研究課題名(英文) Qualifications as a hero: How has been developed the idea of military heroes in modern and contemporary Europe ?

研究代表者

杉本 淑彦(SUGIMOTO YOSHIHIKO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 30179163

研究成果の概要：一般兵士総体を英雄として顕彰する傾向が強い近現代日本に較べると、フランスにおいては、高級将軍に英雄性を見る傾向が強く、イギリスにおいては、特定の人物ないし勢力を軍事英雄として称揚する傾向がもともと弱いことが確認された。また、ヨーロッパ全体を視野に入れると、第一次世界大戦以降の戦没者慰霊の儀礼方法には共通性が多々見られ、そのこと自体が、顕彰には政治的意図が込められていることを物語っていると考えられる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,700,000	0	3,700,000
2007年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	8,700,000	1,500,000	10,200,000

研究分野：フランス近現代史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：軍事英雄、英雄崇拜、国民意識、ナポレオン神話、ヒンデンブルク神話、無名戦士、凱旋門、戦没者追悼

1. 研究開始当初の背景

従来の歴史学において、軍事英雄とされる人物の研究は、伝記研究か、その人物が政治過程に及ぼした影響の究明などの政治史研究がもたらされた。それに対して本研究は、国内政治や国際関係との連関でどのように英雄像が構築されるかという政治史観点に留意しつつも、社会史・心性史観点を重視し、英雄に投影される価値観と歴史意識にまで考察を深めることを目指した。

イギリス・フランス・ドイツはヨーロッパ連合として統合への道を歩んでいるが、英雄観のような歴史認識を各国国民がどのよう

に共有していくかは、統合の成否を左右する重大な要素である。ヨーロッパ共通教科書が作成されるようになったこと自体が、英雄観とヨーロッパ統合問題が不可分の関係にあることを示しているだろう。英雄観は「戦争の記憶」のなかでも特筆すべき要素であり、「戦争の記憶」をめぐる揺れ動いている日中・日韓・日朝関係の現状を考えれば、日本にとって英独仏の英雄観は彼岸の問題ではない。イギリス・フランス・ドイツの経験は、アジアという枠組みのなかで生きる現代の日本に、参照すべき多くのものを提供してくれるだろう。研究の出発点には、このような、

すぐれて現代的な問題関心があった。

2. 研究の目的

軍功により、政権のみならず民衆から「英雄」とみなされ顕彰されてきた人物が、人類史上にたくさんいる。そのような人物を複数取りあげ、その顕彰の様態・変遷・作用を究明する。そしてそれを通して、当該諸国における「国民意識」を、宗教観や歴史意識を中心に、異同に留意しつつ解明する。これが、本研究の全体構想である。

そして本研究は、比較史的・関係史的アプローチをとることで、イギリス・フランス・ドイツそれぞれの「国民史」研究の成果を踏まえつつ、「国民史」を越える「ヨーロッパ史」をめざす。

3. 研究の方法

従来の社会史研究が重視してきた教科書分析にとどまらず、記念像と国家施設を用いたの英雄崇拜儀礼、ならびに文学、映画、絵画、演劇、博覧会などのなかで表象されてきた英雄像を分析するという手法にも、本研究の特色がある。換言すれば、社会学や文学研究が発展させてきたカルチュラル・スタディーズの手法を導入することが、歴史学研究としての本研究の特色である。

4. 研究成果

(1) 第一次世界大戦直前の10年間にイギリス各地で流行した野外歴史劇「パジェント」に現れる軍人や君主といった「英雄」は、しばしばイギリス史全体のなかでも「英雄」と目されるような著名な人物であること、彼らが開催地でなした事績（史実のみならず伝説的・創作的要素も含まれる）をモチーフとするエピソードが劇全体のなかでも見せ場となったこと、これらの英雄が活躍した時代の地元の「庶民」が地元住民によって演じられることで「住民の先祖」「町の英雄」を顕彰する様子を解明した。だが、もっとも重要な知見は、地方都市で開催される歴史パジェント（ページェント）を分析することで、20世紀初頭のイギリスにおいては、特定の人物ないし勢力を軍事英雄として称揚する傾向はさほど強くなかったことが明らかにされたことである。軍事英雄観の育成による「国民意識」の形成という、従来の支配的見解への修正を迫る知見である。

(2) 第一次世界大戦におけるタンネンベルクの戦いで一躍国民的英雄となったヒンデンプルクが、ワイマル共和国においてもその人気を持続させたこと、そしてヒトラーたち

ナチスが、政権掌握後に権力を盤石のものとするためにヒンデンプルクの人気や権威を巧みに利用したことを明らかにした。

具体的にはまず、ワイマル共和国の2度の大統領選挙（1925年と1932年）を取り上げてヒンデンプルク人気がいかにドイツ国民のあいだで根強いものであったのかを示した。ついで、ナチスの権力掌握後に関しては、国会選挙戦でのポスターや、国会開会式の演出、とりわけヒンデンプルクの葬儀を取り上げ、図像や儀式を分析することによって、ナチスがヒンデンプルクのどのようなイメージを、どのような形で強調しようとしたのかについて考察した。

その結果、まず第一に、ワイマル共和国反対派がヒンデンプルクの軍事神話化に成功する他方で、共和国擁護勢力がそれに対抗しうる「神話」をつくり出すことに結局は成功しなかったことが明らかになった。

第二に、ナチスの権力確立には、失業者の削減といった具体的な政策だけではなく、「軍事的英雄」ヒンデンプルクを利用した巧みなイメージ戦略も大きく寄与していた。このことは、19世紀から続く英雄崇拜儀礼を考察するうえで非常に重要だと思われる。

(3) フランスにおけるパンテオンならびに戦没者慰霊碑の現地調査をおこない、それを踏まえてヨーロッパ全体の戦没者慰霊の儀礼方法について比較検討をくわえた。そこから、第一次世界大戦以降の諸戦争の戦没者慰霊の儀礼方法には共通性が多々見られることが明らかになった。そして、共通性があること自体が、顕彰には政治的意図がこめられていることを物語っている、との結論に達した。今後は、日本およびアジア各地における戦没者慰霊儀式との比較検討が必要となるだろう。

(4) フランスにおけるナポレオン崇拜調査と、現代における靖国神社信仰の実態調査をおこない、フランスと日本の比較検討を進めた。フランスにおいては、特定の高級将軍に「英雄性」を見ようとする傾向が強いのに対して、日本においては、無名の一般兵士総体を「英雄」として顕彰する傾向が強いことを確認した。戦争の敗者なのか勝者なのか、そして戦争責任をどこに帰するのかという国民心性の違いが、そのような差違を生んでいると考えられる、という知見を得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

(1) 長井伸仁 「歴史研究と記憶——西洋史学の立場から」『フランス哲学・思想研究』査読有、第13号、2008年、39～47頁。

(2) 原田一美 「「ヒンデンプルク崇拜」から「ヒトラー崇拜」へ」『大阪産業大学人間環境論集』査読無、第7号、2008年、1～20頁。

(3) 杉本淑彦 「モニュメント研究の新地平」『史林』査読有、91巻1号、2008年、256～263頁。

(4) 川本真浩 「地域イヴェントとしての「パジェント」の流行——二〇世紀初頭イングランドの事例から」『人文科学研究』（高知大学人文学部人間文化学科）第14号、査読無、2007年、1～22頁。

(5) 杉本淑彦 「フランス革命理念と対外侵略のハーモニー」『世界史のしおり』査読無、帝国書院、31号、2007年、21頁。

(6) 原田一美 「『黒い汚辱』キャンペーン」『大阪産業大学人間環境論集』査読無、第6号、2007年、1～21頁。

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 長井伸仁 「歴史研究と記憶——西洋史学の立場から」日仏哲学会・2008年春季研究大会、2008年3月22日、同志社大学

(2) 杉本淑彦 「エジプト遠征の奇妙な記憶——オリエント服のナポレオン」（「文化研究と越境」2007年3月4日、北海道大学スラブ研究センター）

(3) 杉本淑彦 「記憶「英雄」拿破仑——埃及遠征的奇妙回忆」（2006年12月16日、北京大学歴史学部）

〔図書〕（計 2 件）

(1) 長井伸仁、山川出版社、『歴史がつくった偉人たち近代——フランスとパンテオン——』2007年、191頁。

(2) 杉本淑彦 「ターバンをかぶったナポレオン」京都大学学術出版会、紀平英作編『グローバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて 下巻：共生への問い』、2007年、253～278頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉本 淑彦 (SUGIMOTO YOSHIHIKO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30179163

(2) 研究分担者

原田 一美 (HARADA KAZUMI)
大阪産業大学・人間環境学部・教授
研究者番号：00278566

川本 真浩 (KAWAMOTO MASAHIRO)
高知大学・人文学部・准教授
研究者番号：20314338

長井 伸仁 (NAGAI NOBUHITO)
徳島大学・総合科学部・准教授
研究者番号：10322190

(3) 連携研究者

越野 剛 (KOSHINO GO)
北海道大学スラブ研究センター共同研究員
研究者番号：90513242